

第 33 回 AALA フォーラム

主催：アジア系アメリカ文学会（AALA）

日時：2025 年 9 月 20 日（土）～21 日（日）

会場：日本大学芸術学部・江古田キャンパス 南棟 S302 教室

〒176-8525 東京都練馬区旭丘 2-42-1

＜アクセス＞ 江古田駅 徒歩約 1 分（北口）

西武池袋線池袋駅から約 6 分（各駅停車）

新江古田駅 徒歩約 9 分（A2 出口）

都営大江戸線新宿駅から約 15 分

小竹向原駅 徒歩約 11 分（2 番出口）

東京メトロ有楽町線・副都心線渋谷駅から約 20 分

テーマ：「（アジア系）トランスボーダー文学とインターセクショナリティ（交差性）」

——人種／ジェンダー／セクシュアリティ」

第 1 日：9 月 20 日（土）

13:15～ 受付

13:50 開会の辞 会長 山本 秀行（神戸大学）

14:00～17:30 シンポジウム

「（アジア系）トランスボーダー文学とインターセクショナリティ（交差性）」

——人種／ジェンダー／セクシュアリティ」

司会：山本 秀行

特別パネリスト：

- ・宇沢 美子（慶應義塾大学）「『オデュッセイア』の 21 世紀版翻案・翻訳から考える越境と交差性」

パネリスト：

- ・松浦 恵美（日本大学）「ヘンリー・ジェイムズとホワイトネス
——「白い」ニューポートが隠すもの」
- ・渡邊 真理香（中京大学）「周縁からの星明かり
——Ryka Aoki の *Light from Uncommon Stars* における女たちの交差」
- ・中垣 恒太郎（専修大学）「グラフィック・ノベルにおけるアジア系表象の現在
——オルタナティヴなメディア文化の想像力と『DE I & B』をめぐって」

18:00～ 懇親会

会場：イタリアン・レストラン パンコントマテ 江古田店（江古田駅徒歩3分）

〒176-0006 東京都練馬区栄町 30-1 2F TEL 03-3557-3555

会費：5,000 円

第2日：9月21日（日）

9:00～ 受付

※9:00～10:00 総会（会員のみ）

10:00～12:00 特別講演Ⅰ

“‘Almost Words’: Sense, Sensibility, and the Paranoid Style in Cold War Asian American Literature”

Prof. Allan Isaac (Rutgers University, USA)

司会：牧野 理英（日本大学）

12:00～13:00 休憩（昼食は各自でご用意ください）

13:00～15:00 特別講演Ⅱ

「ディズニー映画にみるインターセクショナリティの政治学」

舌津智之 氏（立教大学）

司会：古木 圭子（奈良大学）

15:00～17:50 個人発表

司会：池野 みさお（津田塾大学）

<第1発表>

「越境者の「空」なる自己——Cultural Identity の視点から読む *A Tale for the Time Being*」

西山 由佳（関西学院大学・院）

<第2発表>

「日系強制収容というトラウマからの回復（不）可能性

——Kerri Sakamoto, *The Electrical Field* における他者との断絶」

小谷 真由（神戸大学・院）

司会：小坂 恵理子（法政大学）

<第3発表>

“Collective Narration and the Erasure of Self: Gendered Voice and Racial Invisibility in *The Buddha in the Attic*”

Kahina Aimeur (Ph.D. Student, Nihon University)

<第4発表>

“(Re)Constructing Race in Transborder Vistas: Intersectionality and Takezawa’s 3R in Kazuo Ishiguro’s *Never Let Me Go*”

Lyle De Souza (Kyoto Notre Dame University)

司会：山本秀行

<第5発表: 特別ポスター発表>

“Utility and Community in *A Map of Betrayal* and *Native Speaker*”

Haiyi Wang (王海颐) (PhD Researcher, Sungkyunkwan University)

17:50 閉会の辞 副会長 牧野 理英

※科研費・基盤研究（B）：「アジア系トランスボーダー文学」の包括的研究枠組創成と世界的研究ネットワーク構築（代表者：山本秀行、研究課題番号：23K25310）の助成を受けています。

～AALA フォーラム参加申込について（How to Register）～

フォーラム参加費用：無料 Participation fee: free

懇親会：5,000 円（パンコントマテ 江古田店）

Reception Dinner at Italian restaurant Pancontomate: 5,000 yen

※なお、懇親会について当日は 100%のキャンセル料がかかります。費用は、当日お支払いいただきます。The cancellation fee will apply after September 19th.

※宿泊が必要な方は各自で手配してください。秋の行楽シーズンで宿泊施設が込み合う時期ですので、早めの手配をお勧めします。Hotels in Tokyo are expected to be in high demand during the forum. We encourage you to make your hotel reservations as soon as possible.

参加希望者は以下のフォームで、8月31日（日）までにご登録ください。

Please register via the Form by August 31st:

申し込み用フォーム（Registration Form）：<https://forms.gle/oc4TRDqYwGYD8Tb37>



上記のフォームがご利用できない場合は、AALA 事務局までメールで以下の情報をお寄せください。If you are unable to access the Form, please send the following information by email to the AALA Office: aala.jp.office@gmail.com

・お名前 (Name)

- ・ ご所属 (Affiliation)
- ・ メールアドレス (Email Address)
- ・ 参加希望セクション (Sections you wish to attend)
 - 第 1 日目 シンポジウム (Day1 Symposium)
 - 第 1 日目 懇親会 (Day1 Reception)
 - 第 2 日目 総会 (学会員のみ) (Day 2 General meeting open only to AALA members)
 - 第 2 日目 特別講演 I (Day2 Special Lecture I)
 - 第 2 日目 特別講演 II (Day2 Special Lecture II)
 - 第 2 日目 個人発表 (Day2 Individual Presentations)

フォーラムに関するお問い合わせは AALA 事務局までメールでお願いします。

For all registration/conference-related questions, please contact the AALA Office by E-mail:

aala.jp.office@gmail.com

講演・発表要旨

シンポジウム:「(アジア系) トランスボーダー文学とインターセクショナルリティ (交差性)
——人種／ジェンダー／セクシュアリティ」

『オデュッセイア』の21世紀版翻案・翻訳から考える越境と交差性」

宇沢 美子（慶應義塾大学）

本発表では、オデュッセイアの再話論と北米英の文学について考える。二一世紀のカナダ人作家アトウッドの『ペネロピヤード』、トルコ系アメリカ人作家プチャクの「トロイア戦争博物館」といった作品を最終地点として、そこに至るまでの19世紀、20世紀において、人種、ジェンダー、戦争というインターセクションから、どのような再話や翻訳が生まれ、この古代ギリシアの物語が、現代の物語へと仕立て直されてきたか、を概観する。そこからアメリカ文学、ジェンダーと人種の重なり、海洋文学、コスモポリタニズム、ひいてはアジア系アメリカ文学へも繋がるトランスボーダー文学の自己越境的な翻案可能性について考えてみたい。

「ヘンリー・ジェイムズとホワイトネス——「白い」ニューポートが隠すもの」

松浦 恵美（日本大学）

ヘンリー・ジェイムズの旅行記『アメリカの風景』(1907)におけるロードアイランド州ニューポートの表象と人種表象について論じる。 Toni・モリソンがアメリカ文学における人種問題への「沈黙と回避」を指摘するように、本テキストにおいて、18世紀にニューポートで盛んに行われた奴隷貿易の歴史は完全に抹消されている。しかし、この街を「優美な白い手」になぞらえるジェイムズの言説を、なにかが隠蔽されていることをむしろ指し示すものとして読むこともできるのではないか。本発表では、ジェイムズの人種表象（とその不在）を、彼自身のジェンダー、セクシュアリティ、そしてナショナルティとの関係において読み解くことを試みる。

「周縁からの星明かり——Ryka Aoki の *Light from Uncommon Stars* における女たちの交差」

渡邊 真理香（中京大学）

日系のトランス女性作家 Ryka Aoki の *Light from Uncommon Stars* (2021) はヒューゴー賞長編小説部門ノミネート、アザーワイズ賞（旧ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア賞）受

賞の SF 小説である。アジア系アメリカ文学は常に差別の交差に焦点を当て続けてきたが、*Light from Uncommon Stars* の主人公 Katrina のようなアジア系トランス女性の経験を扱ったものは少ない。本作では、宇宙人、悪魔、バイオリン、ドーナツ、AI 等々さまざまなキーワードが溢れる中で、女性登場人物たちのつながりに注目したい。家父長的価値観や女性蔑視に苦しめられる女性たちの出会いと結びつきが、最終的には Katrina の自己肯定に結実する過程を考察することで、アジア系コミュニティ内の差異を浮かび上がらせ、十分に包摂されてこなかった人々に我々の目を向けさせる Aoki の創作スタイルについて考えたい。

「グラフィック・ノベルにおけるアジア系表象の現在

——オルタナティブなメディア文化の想像力と『DEI & B』をめぐって」

中垣 恒太郎（専修大学）

2000 年代に「グラフィック・メモワール」と呼ばれる回想録が目立った動きを示すようになったことを契機に、それまでコミックスに馴染みのなかった読者層にまでも届く、多様な視点によるグラフィック・ノベルが活況を呈している。その中でもマイノリティとして米国の高校生活を中国系 2 世の視点から描いた Gene Luen Yang, *American Born Chinese* (2006) や、「サイゴン陥落」以後、米国に移住してきた両親の波乱に富んだ人生を娘の視点から辿るベトナム系女性作家 Thi Bui, *The Best We Could Do* (2017) など、アジア系によるグラフィック・ノベルの作品群は「DEI & I」（多様性・公平性・包括性・帰属意識）の観点について考える上で有益な視座をもたらしてくれる。アジア系の書き手が今現在どのように新たな表現手段を創り出しているのか、さらに、若い読者に対する教育的効果についても展望する。

特別講演 I

“‘Almost Words’: Sense, Sensibility, and the Paranoid Style in Cold War Asian American Literature”

Prof. Allan Isaac (Rutgers University)

In 1976, Maxine Hong Kingston’s *Woman Warrior* arguably set the tone for the institutional founding of Asian American Literature in the marketplace and in higher education. The title invokes the famous torture scene in the novel and Richard Hofstadter’s 1963 lecture on “The Paranoid Style in American Politics.” Asian American literature was borne from communal struggle and forged from the crucible of Cold War paranoia, circulating again today with turbulent new life. This paranoia as a pervasive “style” of apprehending the world, according to Hofstadter, sees the enemy everywhere to erect violent borders and to generate binaristic absolutes, whereby only the elimination of one or other force is the only conceivable end. How do the origins of our field continue to condition how we teach

literature? Hofstadter asserts that “one of most valuable things about history is that it teaches us how things do not happen.” As ethnic studies is obliterated in the U.S., what can Asian American literature teach us now? What life-worlds and other-worlds could happen in the word, the work, and the world?

A Brief Biography: Dr. Allan Punzalan Isaac is Professor of American Studies and English at Rutgers University-New Brunswick, NJ. He specializes in Asian American and comparative race studies and examines issues around migration, postcoloniality, gender and sexuality, and the Philippines and its diaspora. His first book *American Tropics: Articulating Filipino America* was the recipient of the Association for Asian American Studies Cultural Studies Book Award. His second book is entitled, *Filipino Time: Affective Worlds and Contracted Labor*. He has taught at De La Salle University-Taft in Manila, Philippines as a Senior Fulbright Scholar. His current research focuses on death and the otherworldly in Filipino diasporic visual culture.

特別講演Ⅱ 「ディズニー映画にみるインターセクショナリティの政治学」

舌津 智之 氏（立教大学）

ある種の古典的なディズニー映画は、今日的なインターセクショナリティの概念を先取りしていた。たとえば『ダンボ』の主人公は、障がい者／人種的他者／性的マイノリティの象徴的な要素を合わせ持っている。本発表ではまた、『ダンボ』における「ピンクの象」の悪夢を反復する『くまのプーさん』を取り上げ、その同時代的背景としてあるベトナムの影をふまえつつ、そこに透かし出される白人性と男性性の連動的な不安を見据えたい。

講演者略歴：舌津智之氏

東京大学大学院修士課程修了、テキサス大学オースティン校にて博士号取得。現在、立教大学文学部教授。抒情とジェンダー、セクシュアリティの諸相に注目し、モダニズム期を中心としたアメリカ文学、及び日米の大衆音楽文化を研究。著書に『抒情するアメリカ—モダニズム文学の明滅』、共著書に『現代アメリカ—日米比較のなかで読む』『ブルースに囚われて—アメリカのルーツ音楽を探る』『ジェンダー白書 3—女性とメディア』他多数。

個人発表

<第1発表>

「越境者の「空」なる自己——Cultural Identity の視点から読む *A Tale for the Time Being*」

西山 由佳（関西学院大学・院）

本発表は、日系三世アメリカ人作家 Ruth Ozeki (1956-) の *A Tale for the Time Being* (2013) において二人の主人公が展開する自己探究の過程を、Stuart Hall による“Cultural Identity”の概念を参照しながら読み解き、その描写が作家自身の複合的な自己を象徴する仏教思想「空」を体現していることを指摘する。

Hall はアイデンティティを固定的な本質として捉える見方を問題視し、アイデンティティを決して完成することのない変化の過程として捉える“Cultural Identity”の概念を提唱した。本作品の二人の主人公——アメリカで育ちアメリカ人を自認するが故に日本への帰国後自己を見失う日本人 Nao と、「日本人の子孫」としての意識を強く持つカナダ在住の日系アメリカ人 Ruth——は、時空を越えて出会った他者との間に「差異」と「繋がり」を見出しながら、常に自己を揺らがせる。彼女たちはまさに、Hall の説く流動的なアイデンティティの体現者である。

本研究は、このような描写が日系三世作家 Ozeki 自身の自己探究を反映しており、またその末に彼女が辿り着いた仏教思想「空」——自己の不完全性が他者との縁起を生じさせるという教え——の象徴であることを指摘する。

<第2発表>

「日系強制収容というトラウマからの回復（不）可能性

——Kerri Sakamoto, *The Electrical Field* における他者との断絶」

小谷 真由（神戸大学・院）

日系カナダ人三世作家 Kerri Sakamoto(1960-)の *The Electrical Field* (1998)は、1970 年代のカナダを舞台とし、ある殺人事件をきっかけに蘇る、語り手である日系カナダ人二世女性 Asako の日系強制収容の記憶を断片的に描く物語である。本作品における Asako のヒステリックな言動は、日系強制収容や、そこで自らの行動が招いた兄 Eiji の死というトラウマ的出来事に起因すると指摘される。収容所解放から 30 年が経過してもなお理解不能な過去からの影響を受け続ける Asako を描くことで、日系強制収容の問題を過去の出来事として完結させないことに成功していると評価されてきた。本発表では、なぜ Asako のトラウマ的記憶が作中の登場人物に対して語られず、Asako の症状が回復に至らなかったのかについて検討する。特に、彼女が引き受けざるを得なかったケアの営みに注目し、自身の心の傷がケアされることなく、一方で自らは家庭内外で他者へのケアを強いられるという、彼女の置かれた人種的・性的抑圧構造を分析する。また、彼女の記憶の語りを促す、殺人事件によって恋人を失った少女 Sachi との交流をとおして、Asako の個人的に抱えるトラウマ的記憶がいかに語られ、語られないのかを考察する。そのうえで、強制収容を経験していない三世作家

がその集合的・個人的記憶を物語化することによる、記憶の継承の可能性を明らかにする。

<第3発表>

“Collective Narration and the Erasure of Self: Gendered Voice and Racial Invisibility in *The Buddha in the Attic*”

Kahina Aimeur (Graduate Student, Nihon University)

The presentation explores how Julie Otsuka’s *The Buddha in the Attic* uses collective narration to depict the erasure of individual identity among Japanese picture brides in early 20th-century America. Told in the first-person plural “we,” the novel reflects the women’s collective struggle with racial invisibility, gendered oppression, and social marginalization. The use of collective narration emphasizes how these women are perceived not as distinct individuals, but as a homogenous group defined by their race, gender, and immigrant status. The novel illustrates how different forms of oppression—such as labor exploitation, forced assimilation, and wartime xenophobia—render these women voiceless in the dominant historical narrative. However, Otsuka’s collective narration is both a representation of erasure and a subtle form of resistance. By giving voice to the collective “we,” the novel restores visibility to women who were long excluded from American history, transforming silence into testimony and absence into presence.

<第4発表>

“(Re)Constructing Race in Transborder Vistas: Intersectionality and Takezawa’s 3R in Kazuo Ishiguro’s *Never Let Me Go*”

Lyle De Souza (Kyoto Notre Dame University)

This paper analyses Kazuo Ishiguro’s *Never Let Me Go* as a transborder narrative, employing a modification of Yasuko Takezawa’s “3R” framework—Representation, Resistance, and Reconfiguration—alongside intersectionality to explore the manufactured identity and systemic dehumanisation of the clones.

“Representation,” encompassing Takezawa’s concepts of ‘race’ (small ‘r’) and ‘Race’ (capital ‘R’), reveals how the clones are constructed as a biologically distinct and inferior “other” through genetic engineering and a scientifically rationalised system of exploitation, a process mirroring historical racialisation. “Resistance,” or ‘Race as Resistance’ (RR), is observed in the clones’ subtle yet profound assertions of humanity: their artistic endeavours, complex emotional lives, interpersonal bonds, and their poignant search for meaning and deferrals from their predetermined fate as organ

donors. Finally, the narrative achieves “Reconfiguration” by compelling a re-evaluation of humanity itself, challenging bio-genetic definitions through its focus on the clones’ capacity for love and empathy, thereby suggesting alternative models of kinship that move beyond biological assumptions.

The intersecting axes of their manufactured “race,” gendered societal roles (particularly for female “carers”), and liminal (post)human status illuminate unique modes of oppression. *Never Let Me Go* thus serves as a powerful allegory for marginalised experiences within diasporic and transborder contexts, dissecting the insidious and pervasive nature of othering.

<第 5 発表：特別ポスター発表>

“Utility and Community in *A Map of Betrayal* and *Native Speaker*”

Haiyi Wang (王海颐) (PhD Researcher, Sungkyunkwan University)

This paper compares Ha Jin’s *A Map of Betrayal* and Chang-rae Lee’s *Native Speaker* to show how Asian American immigrant men negotiate collisions between personal loyalty and political “utility.” Framing the protagonists’ choices through a consequentialist lens, I argue that a pursuit of outcomes that appear to maximize benefit for self and community often founders within racialized institutions that script the “model minority” as both useful and suspect.

In *A Map of Betrayal*, Gary Shang’s double fidelity to China and the United States dramatizes utilitarian reasoning under Cold War surveillance. A split form—third-person espionage chronicle braided with his daughter Lillian’s first-person search—stages competing moral claims while revealing how justifications of “benefit to both countries” unravel into alienation. The novel’s structure and commentary expose the costs of attempting to serve transpacific communication and personal advancement at once.

Native Speaker situates Henry Park (and fellow Korean American men) in an exclusionary 1970s political order where mainstream xenophobia renders non-mainstream identities intrinsically threatening. Their efforts to convert ethnic capital into political and economic utility remain precarious and ad hoc; even participation in surveillance regimes (e.g., monitoring John Kwang) cannot secure belonging, and “usefulness” becomes a mechanism of discipline.

Across both novels, I trace how double consciousness and dual fidelity shape masculine subjectivity and public action, linking intimate life to state projects. The analysis clarifies why measuring immigrant worth by “utility” is politically misleading: the protagonists’ ad hoc position within white American mainstreams cannot reconcile communal welfare with individual ethics as classical utilitarianism presumes.

The conclusion distinguishes outcomes-focused reasoning from ethical ground, showing how consequentialist calculus—without robust normative commitments—licenses betrayal, surveillance, and exclusion. By reading espionage, campaigning, and community mediation together, the paper connects transpacific histories to U.S. democracy and exposes the limits of “model minority” utility as a path to inclusion.